教養教育に関するフォーラム

学長　小川秋實

「教養とは何か」,「教養教育はいかにあるべきか」を徹底的に討論するフォーラムを平成８年１月30，31日乗鞍の「あづみ荘」で開催した。全学部からこの問題に関心がある教官計35名が参加し，討論は第１日の午後と夕食後，第２日の午前と計７時間に及んだ。討論の形式としては，私が話題提供した後，私の司会で自由討論した。参加者はいずれも論客で発言順の整理に苦労するほどであったが，それぞれ見解を遠慮なく述べていただくことができた。もともと結論を求めることを意図していなかったので，出された多様な見解を纏めることは容易ではないが，以下にその概要を報告する。

(1)　教養教育の必要性

「話題提供」

日本人は話の弾む知的人間としては失格で，たとえ英会話を学んでも知的内容を話せないといわれる。これは，キャチアップを使命とした日本の大学は専門職業教育に傾斜し，教養を中核に据えるゆとりがなかったこと，能力・適性に即した教育は差別という平等主義，頑張ればできるという努力主義が支配して膨大な知識の記憶を強いたことから，判断力・創造力を培うことに向けられなかったからである。社会の変化・複雑化に柔軟に対応し，専門を越えて活躍するには，判断力と創造力が必要になる。これには専門知識だけでは不十分で，教養と基礎学力がなくてはならない。

一方，専門教育の面からみると，専門レベルについていけない学生が多くなり，従来の研究即教育は通用しなくなっている。また，既成の知識体系の理解と記憶に主力を注ぐ従来の専門教育に対して学生のみならず社会からも拒否反応がでている。初等中等教育においても，新しい学力観と称して，詰め込み教育の否定，何が課題か見いだし，自ら考え，主体的に判断し，それを解決する能力の育成に主眼をおくようになってきている。しかし，その成果は必ずしもあがっていない。このような観点から，大学における教養教育の充実は不可欠ではないか。

「自由討論」

教養が，市民としての常識を身に付け，知的創造力を培うことなら賛成。

新カリキュラム作成の過程で学内で議論され，それは「意見書」の中に纏められているはずだ。

知的コミュニケーションの前提となる広い教養は必要だ。戦後の教養教育は，専門教育に対置され，人間形成，公民教育の意味を持つものになった。今は急速な価値観の転換期にあり，新しい知的創造力，発想力が求められている。これらを涵養する教養教育が必要だ。

思考力・判断力を培うには現在の教育方法では駄目で，授業法の改善が必要だ。

本来教養教育は高校で担うべきものと思うが，高校教育は受験教育に偏って教養教育は期待できない。したがって，高校の延長のような講義では駄目だ。学生が主体的に授業に関われる工夫が必要だ。

知的能力・創造力の涵養は大学教育の目的だが，これは教養教育でなされるものでない。

専門教育に入ってから教養とは何かを考えさせるほうがよい。自分が関心を持つ専門分野で判断力・創造力を伸ばすほうがよい。

教養という学問分野はない，人文・社会分野では職業教育としての専門教育は行っていない。むしろ，レベルの高い教養教育をしている。

教養は健全な市民を造る公民教育だ。

(2) 教養とは何か

「話題提供」

教養とは，ある先達は「文化的な身のこなし」であるといい，ハーバード大のアーツ アンド サイエンセス学部長は，謙虚さ，人間性，ユーモアであるといっている。ある私立大の外国人教授は，幅広い知識や視野を持ち，正しい態度と心構えがあることという。私は，適切な思考力・判断力を持ち，社会生活に適応できることだと思う。思考力・判断力は，いかに考え，行動するか，つまり，いかに頭脳を使うか，これの繰り返しで培われるのではないか。教養は詰め込んだ知識ではない。試験前に覚え，すぐ忘れるような知識は無意味でしかない。なお，理工系に教養教育不要論があるが，ある大学院大学長は，技術的訓練を伴わない理工系教育は存在しないが，この訓練は精神的フレキシビリテイ（創造力，構想力）を失わせ，専門バカを造る。大学院大学でも1/3は共通教育が必要と述べている。

「自由討論」

精神なき専門人，心情なき享楽人では駄目だ。正しい判断力の前提に広い知識，歴史や文化についての理解が必要だ。人間について知らなければ技術は人間に役立たない。

工学系の卒業生へのアンケートでは，技術と社会との関わりについて勉強しなかった反省があった。

早期に専門教育を始め，教養とは何かを学生に分からせる。分野別に教養にバリエーションがあってよい。

学生に何を学んできてもらいたいか社会からの要望を調べる必要がある。

アプリオリに教養とはこれだというものはない。バリエーションがあって当然だが，その中に共通のものがあるはずだ。

自分の力で未知のものを知る喜びを身に付けさせる。そして，やる気を起こさせれば教養教育はできたといってよい。それには顔を付き合わせての教育が必要だ。

学生に一流の研究者に接しさせ，体系的に物事を理解する視点を持たせる。修士論文を纏めるにも，背景に広い教養が必要だ。

ある大学の医学部では一貫教育を全て自前でやろうとしたが，教養教育の重要性を再認識してカリキュラムの再編を検討している。

教養教育にはいろんなやり方があってよい。

社会が当面している諸課題を授業に組み込み，学生に課題を認識させること，データを示して考えさせること，そして懐疑的精神を培うことだ。教養教育では日本国憲法と教育基本法に立ち返って行っている。

教養とは，旧制高校と同じ考えのようだが，学生の資質・能力が不揃いな現状で理念どおりにいくのか疑問だ。学生にどのようにして積極的に取り組ませるかが問題だ。

(3) 教養教育の内容

「話題提供」

教養教育とは，和辻哲郎は，「人類が築いてきた精神的な宝（芸術，哲学，宗教，歴史）によって精神的な芽を培養すること」といい，ある大学総長は，「ある定まった視点，人生観，世界観に裏打ちされた体系を若い魂に提示し，深い感動と情熱をかき立てること」といっている。アメリカでのリベラルアーツのコンセプトは「多様な知識に構成的な統合を要求する教育」となっていて，リベラルアーツには，国語，外国語，文学，生命科学，数学，哲学，宗教学，物理化学，心理学，社会科学，美術芸術，地域民族研究，マルチ学際研究，自由総合研究が含まれ，一方，職業専門教育には，農学，保険関連学，建築，ビジネス・経営，コミュニケーション，自然保護資源，教育，工学，観光科学，家政学，法律，神学などがある。

教養教育は専門の序論ではなく，一分野の概論的通説や入門過程でもない。専門と教養の違いは，内容ではなく目的，取り扱い方にあるという意見に私は賛成する。東大教養学部で作成した「知の技法」は，既成知識の伝達ではなく，問題意識に基づいて自ら懐疑，調査，討論，表現によって深い認識に達すること，すなわち欧米での知の作業のプロセスを身に付けさせることをねらっている。同じく作成された「The Universe of English」は，作者によると，知に飢えた学生を奮い立たせるマジなリーダーで，現在の標準的英文からなり，訳読しないようわかりやすい英語表現の注を入れ，知的・時事的関心に応えるバラエテイだという。教養教育にはこのような努力がいるのではないか。

教養教育としての医学を取り上げるとすると，医学部では約120単位の専門教育をしているが，これを2単位に圧縮して，解剖学，生理学，病理学，内科学，外科学などの概論を聴いて果たして医学を学んだ気になるであろうか。むしろ身近な疾患，例えば，高血圧を取り上げ，その発生を理解するために必要な解剖，生理，病理，診断法，治療法，最先端の研究成果，今後に残された問題を学んだほうが医学を学んだことになるのではないか。

新入生は柔軟な頭脳を持ち，吸収力が大きく，大学での学問に先入観も予備知識もない。このような学生に頭脳を使わせるような，よい授業をするのはプロ中のプロの仕事ではないか。ある程度の知識も持っている高年次生への専門教育より新入生への教養教育が難しいと思う。

「自由討論」

それぞれの学問を通じて世界観・価値観を持たせることが教養教育。人間のあり方を追求していくことが教養だ。

自分が学生のときは教養の講義にでなかったが，好きなことができ，人間関係もできて有

り難かった。しかし，１年次生の目は輝いているので，学生がおもしろくないという授業は教官が悪い。学生の評価を教官へフィードバックすることが必要だ。

専門を選択するきっかけになるような魅力的な講義が必要だ。

学生の希望する教養と教官の考える教養とずれがある。学生の知りたいものをカリキュラムに取り入れるべきだ。

熱心に講義しても分からないというので，学生と教官にギャップがある。学生がいっていることに応えるだけではいけない。学生の評価はにわかに信じがたいと思う。

教官の本音が出て，癖があり，取るなといわれるような強烈な個性的な講義が必要だ。教養部では学生の要求にミスマッチがあったのではないか。

いや，教養部では全て全力投球したはず，学生の評価は慎重に受け止めるべきだ，後期の学生の目は輝いていない。

教養部の廃止は間違ったのではないか，現状で教養を教えることができるのか不安だ。

講義スタイルはやめるべきだ。授業法を変えれば学生は勉強する。教官は教えるのではなく共に学ぶ姿勢が必要だ。

教養は人間の本性に根ざしたもので，信大卒業生に色を付ける，これが教養だ。

いや，色を付けるのは学部の仕事。学生は何か専門を身に付けたいと大学にくる。全体として色を付けるべきでない。

教養教育に過度に期待するな，市民としての常識を与えればよい。

色でなくても共通の理念を造るべきだ。

判断力・創造力を付けることが理念で，色は各人が付ける。

信州は教育の題材が多いし，感受性が高いときに何かすべきだ。専門に入ってしまうと戻れない，全学で共通項を造るべきだ。

信大の資源を活かすべきで，これには共通教育センターがイニシアチブを取るべきだ。

課外活動も視野に入れ，立地条件を活かすべきだ。

各学部の考えを出し合って，共通理念を造るべきだ。

学生に付加価値を付けることで，例えば英語なら TOEIC を全学でやったらよい。１年次生が教養教育に相応しいのか問題だ。

社会はどの学部卒業というより信大卒業生としてみていることを忘れてならない。

学部の底が抜けたので，共通部分が出るはずだ。

(4)　授業法の改善

「話題提供」

自己点検評価運営委員会が行った学生に対するアンケートでは，共通教育は期待どおりであった19%，期待はずれ30%，受講制限受けた77%，受けなかった22%，しかし，松本での共通教育に賛成69%，反対13%であった。教官は教育に熱心であった87%，熱心でなかった９%，しかし，学生からの質問を引き出した35%，引き出さなかった62%，親しく話せる教官がいる18%，いない81%，授業に全体として満足28%，満足できない71%であった。私自身は10数年来，医学部の高学年次生の全員から教養課程の教育について個人的に，またアン

ケートで感想を聞いてきたが，10人中９人が教養課程は無意味だったと述べている。私は共通教育センターでの授業を聴講させていただいたが，その印象では，教官は実に熱心に話しているが，聴いているのは前方に座った一部の学生のみで，内職，居眠り，私語，漫画を読むなどしている学生が少なからずいた。残念に思ったのは，１授業を除き，学生からの質問がなく，学生との対話が全くなかったことである。これでは教官の熱意のわりに教育効果があがらないように感じた。双方向授業にし，学生に考えさせるように授業方法を変える必要があると思う。

「自由討論」

学生は単位の取りやすいものを選ぶので，専門教育の側から１年生に必要な縛りをすれば，適正規模の授業になるのではないか。

大人数教育と少人数教育と両方やればよい。少人数教育では受講制限する。

人数が多いとゼミがゼミでなくなる，それに今の学生は質問しない。

卒研のゼミで初めて双方向授業ができる。新入生ゼミと総合科目が目玉なので，これに対して何をするか議論すべきだ。

授業方法は各教官が工夫してきたはず，そのノウハウを公開すべきだ。

教養部は理念があったはず，廃止に際して総括すべきだ。

若い看護婦はマニュアル対応で，新しい状況に対応できない，教養教育の不足だと思う。

（なお，共通教育の数学では担当教官が少なすぎるとの意見があったが，各論的問題はこのフォーラムになじまないので討論テーマから外した。）

(5) 総合討論

「今までの話題を通して追加する意見はないか。」

１年次生の教育と教養教育が同一視されているが，別にすべきだ。ただし，外国語は基礎なので別扱いにする。

人間教育については自由度があってよい。

遠隔講義ではどのように学生を評価するかが問題だ。単純に優良可の評価はできない。

偏差値で学生を入学させるのはよくない。入試の成績と学業成績に相関はないので推薦，面接を増やすべきだ。不揃いになるが原石はいい。磨けば光る。バラエテイに富んだ，じっくりとした教育が必要だ。

全学協力体制の実現がキーポイントだ。

補習教育は必要なので，そのやり方を検討すべきだ。

学部の壁を取り払って教育すべきだ。

学生のレベル別の教育ができないか。

高年次学生が共通教育を受けるのは賛成だが，隔地から松本で受講するのは大変だ。松本からの出張授業をやってもらいたい。

「教養としての憲法学と専門としての憲法学はどのように違うのか。」

教養教育の憲法は市民として必要な程度，専門では全てを含む。

人文分野では専門と教養を分けにくい。

教養教育では生活にどういう意味を持つか，個別の問題を取り上げ完結する。

自然科学系では，専門の準備教育的なものは教養ではない。専門と社会との関わりが教養で，この二つは別で，共に必要だ。

今までは教養の名のもとで準備教育をやらされてきた。大切なことは，自分の専門を踏まえながら，さらにその枠を乗り越えて他分野を含めて教育する勇気が必要だ。だから教養教育はベテランの教師が担当すべきだ。

数学は専門に不可欠だが，教養としての数学は考え方，分析法を教える。

自然と人間との関係を教えているが，これは専門教育ではない。

教養なしに物理・化学のみをやっていると原爆を造ることになる。

「補習教育と教養教育はどう違うのか。」

数学と外国語では学力が不揃いだ。学力（達成度）別にクラス編成すべきだ。

いや，学力別クラス編成は差別された意識を生み，モラルが低下したので取り止めた経緯がある。能力別クラス編成は慎重にすべきだ。

アメリカでは学力別クラス編成が徹底している。日本ではこれが定着していないのではないか。

「全学協力体制について。」

教養部廃止を残念に思うが，各学部が一貫教育を鮮明にすれば，専門に合わせた教養教育があるはずだ。誰かが教養教育を遣ってくれるという意識があるのではないか。教官と学生が膝を付き合わせる人間教育が必要だ。

全学協力体制で全教官が均等に教養教育をすべきというが，自分は何で貢献できるかが分からない。教養部廃止の理由が分からない。

この議論は，教養教育をやりたくないという気持ちがあるからではないか。元教養部教官は教養教育の専門家ではなく，たまたま教養部に所属しただけだ。全教官が教養教育を均等に担当することはありえない。

全学協力体制は，１年次生の教育を一流の研究者ができるということで，必ずしも元教養部教官がこれに向いているということではない。

一貫教育は個々の学部単独では不可能で，他学部に依存しなければならない。教養教育のあり方を全学で造るべきで，共通教育を信大の統合理念にすべきだ。

高年次の基幹科目は隔地学部でやってもらいたい。

センターを大学の象徴というのは過大評価で，学部のニーズをセンターで調整すべきだ。

「授業法の改善について意見はないか。」

教官は授業法を学んできていない，共通教育センターでこれをやってもらいたい。

学習者サイドに立った教育で，学習は楽しみだということが分かる能力別の授業により学生を没我の境地にさせる授業が必要だ。

使い分ける配慮が必要だが，教材開発が進んでいる放送大学のビデオなども利用したらよ

い。

テレビやSUNSの授業では双方向授業ができない。

授業方法の改善についての情報を流してもらいたい。情報誌発行や，よい授業法の講演を聴くフォーラムをやって欲しい。

「現在の授業では学生に情報を与えすぎているのではないか。知識の詰め込みをやめて，最も重要な概念を3つ4つ理解させるようにしたらどうか。」

その方式は1日1コマが精一杯だ。

情報を切り捨てるのに勇気がいる。切り捨てたことに後悔が残りかねない。結局，時間が足りなくなる。

「今後このフォーラムをどのようにすべきか。」

次回は，授業方法の改善を取り上げるべきだ。

外国語・英語教育について取り上げてもらいたい。

このフォーラムと各種委員会との関係はどうなるか。

委員会の議論に反映すべきだ。

委員会の議論をフォーラムでやることはない。

フォーラムに講師を招いたらどうか。デイベートもやったらよい。

(6)　まとめ

「教養教育の必要性」については，必要ということで一致したが，「教養とは何か」，「教養教育の内容」については，各人各様な意見があって，纏まった結論はでなかった。教養教育における「授業法の改善」については，具体的方法への突っこみは少なかったが，改善しなければならないという意見が多かった。なお，このような討論会を今後も開催することに賛意が示された。

このようなフォーラムは信大では初めてであったが，各学部からの参加者が十分に意見の交換ができ，しかも参加者の間に少しでも親密感が生まれたことは，学部間の壁を低くして大学全体が協力体制を築く上で意義があったと感じている。

「参加者」

本部＝小川秋實，千葉茂俊，人文学部＝赤松常弘，大島征二，加藤鉱三，橋本純一，教育学部＝田巻義孝，巽　勇吉，堀井謙一，熊谷陽一，伊原　巧，経済学部＝又坂常人，青木達彦，徳井丞次，都築　勉，理学部＝伊豆津公佑，酒井潤一，井上和行，医学部＝大橋俊夫，伊津野格，太田　伸，工学部＝清水保雄，鈴木　哲，野村彰夫，脇坂弘之，農学部＝建石繁明，繊維学部＝高須芳雄，西川　耿，三浦幹彦，山浦逸雄，共通教育センター＝中野和朗，吉沢文雄，田原徳夫，医療技術短大＝西村尚志，立岩真也。(事務＝今枝　繁庶務課長，池田義雄庶務係長)。

信州大学長
小　川　秋　實